

これから礼拝を始めます。今日の担当は、社会科の浜岡です。讃美歌「ともにようたおう」5番、讃美歌「ともにようたおう」5番を歌いましょう。



それでは聖書を読みましょう。新約聖書 330 ページ、新約聖書 361 ページ、「フィリピの信徒への手紙」 1 章 9 節、「フィリピの信徒への手紙」 1 章 9 節です。

「わたしは、こう祈ります。知る力と見抜く力とを身につけて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように。」

この夏私は、約1週間、ポーランド旅行に行きました。ポーランドといえば、みなさんは何を思い浮かべますか？ポーランド出身の有名人といえば、コペルニクスやショパンがいます。ヨーロッパの国の中で目立つ存在ではないですが、長い歴史と深い文化をもつ国の一つとして、興味を持っていましたが、前から行きたかった場所がありました。アウシュビッツ強制収容所です。ポーランドの南部の都市クラクフからバスで1時間程度行ったところにあります。アウシュビッツは、広島原爆ドームと同じように、人類の負の遺産として世界遺産に登録されています。

アウシュビッツ強制収容所については、皆さんもこれまで耳にしたことがあると思います。第二次世界大戦中、ポーランドがナチス・ドイツの支配下におかれていた1940年に作られました。最初はポーランド人の政治犯を収容していましたが、次第に、ユダヤ人やソ連軍の捕虜、そして障がい者や同性愛者など、当時ナチス・ドイツにとって必要でないと考えられた人々が多く収容されました。「強制収容所」とは名ばかりで、実際には大量殺人が行われた場所です。ヨーロッパ中からここに連れてこられた人々は、まず到着したとたん選別され、働けない老人・子供・女性は、すぐにガス室に送られて殺されました。また、働ける大人の男性は、そのまま収容所に入れられて過酷な労働をさせられ、衰弱して数ヶ月以内に亡くなる人がほとんどでした。ほんとうに考えられないほどの残酷なことが何年もここでも行われました。現在収容所は博物館となっていて、収容された人々から没収したくつやかばんなどの遺品が展示されていました。その圧倒的な量と、生々しさは、殺された人たちの絶望や無念さを伝えているようで、見ていて本当につらい気持ちになりました。また、たくさんの人が殺されたガス室は一部復元されて、中にも入ることができました。当時、実際に残酷なことが行われた場所を見て、受け止めるということは、私にとって少ししんどい体験でした。

アウシュビッツだけで百数十万人の命が奪われたといわれています。また、ヨーロッパ全土でナチス・ドイツによる大量虐殺（ホロコースト）で殺された人は1000万人を超えるとも言われています。なぜこのような悲劇が起きてしまったのでしょうか。なぜナチス・ドイツはこのような残酷なことができたのでしょうか。ナチス・ドイツの指導者、ヒトラーだけのせいなのでしょうか。もし自分が同じ時代のヨーロッパに生きていたとしたら、もし私がユダヤ人だったら、もしドイツ人だったら、もしポーランド人だったら、どのようにかかわっていたのでしょうか。このことがとても気になり、この旅行を機に、夏に少しナチス・ドイツについて本を読んでみました。その中で個人的に一つ非常に気になったエピソードがあったので、みなさんにご紹介します。

「アイヒマン裁判」というのを聞いたことありますか？アイヒマンという人は、ナチス・ドイツで、ユダヤ人たちをヨーロッパ各地から強制収容所に送る仕事の責任者だった人です。戦後、彼はアルゼンチンに逃げていたところを捕らえられ、1961年からイスラエルのエルサレムで裁判にかけられました。この裁判は、世界中にテレビ中継されました。いまでこそナチス・ドイツによる大量虐殺は世界中に知られていますが、このころはまだあまり報道されていない状況でした。そんな中、裁判の中で、かつて収容所にいたユダヤ人が当時の過酷な体験を証言したことは、世界に衝撃を与えたのでした。また、もう一つ世界の人々にインパクトを与えたことがあり

ます。それは、そのユダヤ人たちの証言を無表情で聞き、自らの罪について認めないアイヒマンの様子でした。世界中の人々は、彼がどんなに極悪非道な人物なのか、と注目して見ていたのですが、彼は決して「極悪人」ではありませんでした。むしろ「普通のどこにでもいる平凡な人」だったのです。「仕事を丁寧に、熱心にこなす、まじめな公務員」。それが彼でした。ユダヤ人に対して特に敵意を持っているわけでもなく、何か崇高な目的のために自分を犠牲にして任務を果たした、のでもありません。ただ、上司の命令に忠実に従い、当時のドイツの法律を守り仕事をしただけ、それだけだったのです。「1人の死は悲劇であっても、数百万の死は統計上の問題にすぎない」。これは、裁判の中での彼の言葉です。結局彼は死刑になりますが、最後までユダヤ人に対する謝罪や、自分の行動についての後悔の言葉は聞かれませんでした。

「誰もがアイヒマンになりえる。」これは、当時の裁判を傍聴した哲学者、ハンナ・アーレントの言葉です。アイヒマンは、自発的に悪を行ったのではなく、考えることを捨てたのでした。このエピソードによって、そのような人が大きな悪を生み出してしまうのだということ、そして、私自身もアイヒマンになりえる、ということをも自分自身につきつけられ、とても怖くなりました。果たして私は彼と同じ立場に立ったときに、彼と異なる行動ができるのだろうか。自分が、収容される立場ではなく、収容する立場に立ったとき、「私はできません」といえるのだろうか。もしくは第三者の立場になったとき、私は傍観せず、助けることができるのだろうか。大量のアイヒマンが当時のヨーロッパにいたからこそ、このような大量虐殺が可能になったともいえます。アウシュビッツでの展示を見たときの息苦しさは、このことを自分自身につきつけられた苦しきなのだと、あらためて思われました。アウシュビッツの悲劇は、決してよそごとではなかったのです。

しかし、私はアウシュビッツに行き、とても力強く思ったこともあります。それは、世界中からたくさんの人々がこの人類の負の遺産を訪れ、真剣にガイドさんの話を聞き、展示を見ている光景を見たことです。現地のポーランド語のツアーはもちろん、英語のツアーもたくさん行われており、世界中からいろいろな民族・人種の人々がアウシュビッツを訪れていることがわかりました。また、私たちを案内してくださった、ポーランド人のガイドのアンナさんは、現在のポーランドやヨーロッパ社会が、よそ者、すなわち移民の人に対して再び寛容でなくなってきたことに憤っていらっしやいました。国は違えど、人類の犯した罪や自分たちの社会のためなところに真剣に向き合い、考え、行動しようとしている人々がたくさんいる光景を見て、一人の人間として私もきちんと向き合い、考えなければいけないと感じました。アウシュビッツの一角に、収容所で犠牲になった人々を追悼する碑がありました。その碑はおよそ 20 個あり、それぞれ、英語、ポーランド語、ドイツ語、フランス語など、ヨーロッパの各言語で書かれていました。英語以外読めませんでしたが、ここで起きた悲劇の普遍性を物語っているように感じました。

世界各地で絶えることのない戦争や内戦、テロ、差別、貧困のニュースを聞くたびに、平和を実現する、というのは大変難しく、実現なんかとてもできそうにない、と思います。しかし、アウシュビッツと同じように、広島原爆ドームや平和祈念資料館にも、毎年たくさんの外国人の方が訪れています。国や民族が違えど、平和を求める気持ちというのは同じであることということ、そしてその実現のためには、一人ひとりがしっかり何が大切なのかを自分で考えて、行動していく勇気を持つことが大事である、ということ、いまさらながら今回の旅行を通して再確認できたように思います。

「それではお祈りします。

神様、今日も礼拝をもってはじめられたことを感謝します。あわただしい日々が続きますが、忙しさを言い訳にせず、本当に大切なことを見失わないよう強い心や知る力を身につけることができるよう、私たちに強めてください。また、心や体に疲れを覚えているものを、お守りください。この祈り、主の御名を通して御前におささげします。アーメン。」